

731部隊「戦争の狂気」

無数の人体標本は、今も脳裏に焼き付く。戦時中、旧満州(中国東北部)で細菌兵器開発や人体実験を行った旧日本陸軍の関東軍防疫給水部(731部隊)。元少年隊員の清水英男さん(95)は「やってはいけないことを平気でやる。それが戦争の狂気だ」と話し、風化防止へ証言を続ける。

宮田村の清水さんは1945年3月、地元国民学校高等科を卒業。教師の推薦を受け4月に14歳で「見習い技術員」として旧満州のハルビンに渡った。「731部隊との説明はなく、『技術員』なのでもの作りの仕事だと思った」

入隊後の約10日間は軍人勅諭を覚えるなどして過ごした。その後「実習室」に配属され、白衣の上官らに囲まれた。目的を知らないまま菌を寒天で培養し、病原菌の基礎知識を詰め込まれた。

7月ごろ、部隊の本部2階の「標本

元少年隊員 清水さん(富)

戦後
80年

無数の人体標本、今も脳裏に



旧日本陸軍の関東軍防疫給水部(731部隊)について説明する元少年隊員の清水英男さん

室」に入った。心臓、肺、脳、体内に胎児が見える女性。部屋には、人体実験のための外国人捕虜「マルタ」の標本瓶が無数にあったという。

「すっかり見ろ」。上官に言われ、ホルマリンの臭いで目が痛む中、涙を流しながら見た。標本室に入ったのは一回だが「見たものは今も頭の中にある」。

忘れようと思っても忘れられない」。

8月9日、旧ソ連が旧満州に侵攻。11日には本部から煙が上がった。撤退を控えた特設監獄にいた捕虜の遺体を焼いたとみられる。翌日、焼却後の骨拾いを命じられた。「嫌だったが仕方なくやめた。骨は重かった」と振り返る。

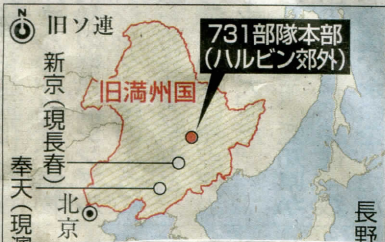
終了後は同僚と監獄に爆弾を設置した。部屋の壁には指による血文字で中国語やロシア語が書かれていた。証拠隠滅のため、部屋は爆破された。

14日朝、上官から自決用の拳銃と青酸化合物を手渡された。拳銃はトランクに隠し、青酸化合物は二重に履いた靴下の間に入れた。夕方から列車で移動を始め、15日には新京(現長春)手前で終戦を知った。翌日に着いた奉天(現瀋陽)では先輩から帰国を告げられ、安堵した。拳銃と青酸化合物は釜山から日本に帰る船上で投げ捨てた。

清水さんは帰国の際、「731部隊の軍歴を隠す」「公職に就かない」「隊員相互の連絡を取らない」ことを命じられた。病院関係の仕事も禁じられた

731部隊 旧日本陸軍が

旧満州(中国東北部)のハルビン郊外に本部を置いた部隊。正式名称は関東軍防疫給水部で、ペスト菌などを使った細菌兵器の開発を進めたほか、中国人捕虜らを「マルタ(丸太)」と呼んで人体実験に使った。犠牲者は約3000人とも言われるが詳細は不明。731部隊では、国民学校高等科の卒業生が「少年隊員」として採用された。少年隊員は病原菌に関する基礎教育などを受け、隊員の業務補助に当たったとされる。



め、帰国後は建築士の資格を取って務所を開いた。731部隊による実験や生体解剖などは、部隊関連書籍を読んで初めて知った。

「戦争が続いていれば自分も生体剖をさせられていたかも」と話す清水さん。現在は地元中学校を中心証言への中傷も見られるが「731部隊のような人の道を外れたことが起きたら大変だ。体が動く限り証言したい」と力を込める。